

結論『吾輩は猫である』顔論（第五章）の意味

Junko Higasa 2017.7.15

第五章で吾輩が言う。神は同じ材質で、様々な顔を作った。これは神が意図したものか、それとも同じ顔を作ろうとして失敗した結果か。その答えを考えあぐんでみると、吾輩の目の前に寒月君そっくりの泥棒が現れた。

吾輩の疑問は一気に解けた。寒月君と泥棒が瓜二つなら、人間の中身は顔で測れないと。つまり神は、中身の優劣を意図して顔を作り分けたわけではない。これは「西洋人は他の民族よりも優れている」という観念に対する反論である。

西洋人の顔は美しい。けれど日本人の顔を持っているからといって、中身の才能が劣っているわけではない。ましてや顔にあばたがあるからといって、人間として劣っているわけではない。顔の出来具合と才能の度合いは一致するとは限らない。従って同じ材質で出来た人間なら、平等に同じ材質の才能も持っているはずだ、というのが漱石の論である。寒月君と泥棒の比較に見られるように、発揮される才能は後天的なもので、先天的なものではない。

ロンドン留学で、彼の地の書物を読み漁った漱石は、そこから西洋文学の手法を読み解いた。その手法による表現は、顔の優劣に関係なく、東洋人である自分にも出来る。これが漱石の主張である。

処女作『吾輩は猫である』は、漱石が西洋同等の手法を展開して、上記の主張を証明した作品である。

■吾輩は 24 時間起きているわけにはいかないから、神の視点（19 世紀前半迄の逐一描写法）ですべての出来事を報告することは出来ない。従って神の視点での叙述の順序に倣って、入って来た陰士を紹介できるのは光栄であるが、ここから先は、自分の視点（19 世紀後半の主人公からの視点のみの描写法）で、詳細な描写をお目につけよう。それを可能にするのは「写生文」という日本の優れた手段である。

■ラファエルに寸分違わぬ聖母像を二枚描けというのは、全然似寄らぬマドンナを双幅見せると逼るのと同じこと。弘法大師に、昨日書いた通りの筆法で空海と願いますというのは、全く書体を換えてと注文されるより難しい。どんな天才でも過去の完全模倣や、同一人格上における完全異質表現は出来ない。また小説の基となる言語は、先祖から子孫へ受け継がれていくにも拘らず、同一民族においてさえ完全模倣は出来ていない。東西で違うのは当然である。

「神の視点」で書かれた小説があればほど多種多様なのは、人間に完全模倣の能力がないことを証明している。ここに「神の視点作法」模倣の限界がある。

■寒月君と陰士の顔は瓜二つである。よく見ると髭が違うが、神の制作と見紛うばかりの出来栄である。これが写生文の成せる業である。富子嬢が寒月君の顔に迷ったのなら、瓜二つの陰士にも同じように愛を捧げるだろう。寒月君に振られても、陰士が存在すれば大丈夫である。同様に、神の視点の作物が廃れても、写生文がある限り小説は大丈夫である。